

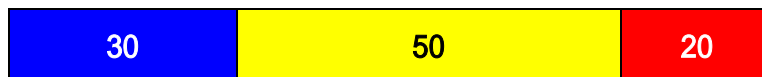
東北地方の3か月予報（11～1月）解説資料

平成 13 年 10 月 22 日 仙台管区气象台

1. 予想される天候

（1）3か月平均気温の予想される各階級の確率（％）

東北地方



低い 平年並 高い
3か月平均気温の各階級の確率

〔概要〕

11～1月の3か月平均気温は「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は50%です。「低い」の可能性は次に大きく、その確率は30%です。「高い」の可能性は小さく、その確率は20%です。

（2）可能性の大きな天候の特徴

11月：天気は数日の周期で変わるでしょう。低気圧の通過後は冬型の気圧配置となって、平年と同様に、東北日本海側では曇りや雨の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多いでしょう。

気温、降水量共に平年並でしょう。

12月：冬型の気圧配置が強まる時期はありますが、長続きしないでしょう。平年と同様に、東北日本海側では曇りや雪または雨の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多いでしょう。

気温、降水量共に平年並でしょう。

1月：時々冬型の気圧配置が強まりますが、長続きしないでしょう。平年と同様に、東北日本海側では曇りや雪の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多いでしょう。

気温、降水量共に平年並でしょう。

なお、11～1月の3か月間の降水量は平年並でしょう。

2. 前回（9月20日）発表の3か月予報からの変更点

なし。

< 参考資料 >

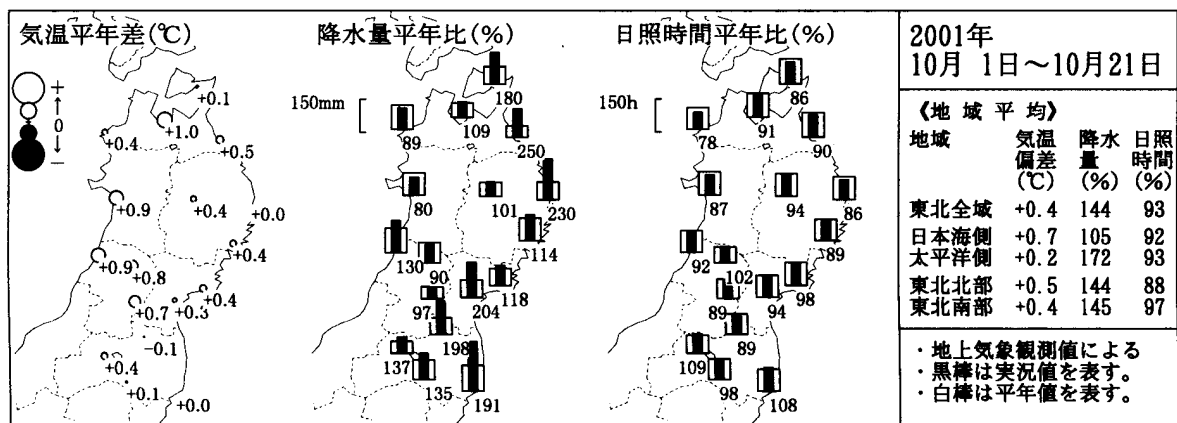
平年のおおよその天気出現日数（日）

	11月		12月		1月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	9	18	5	19	5	20
雨の日	16	8	19	7	20	7

注：季節予報では、「日照率 40%以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」をそれぞれ晴れの日、雨の日の目安として用いている。この2つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。なお、日照率は1日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

3. 最近の天候経過と循環場の特徴

(1) 最近の天候経過



東北地方における10月(1～21日まで)の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)

10月(21日まで): この期間の平均気温平年差は、東北地方で+0.4と平年を上回った。降水量平年比は、東北日本海側で105%と平年を若干上回ったが、東北太平洋側では172%と平年を大きく上回った。日照時間平年比は、東北地方で93%と平年を下回った。

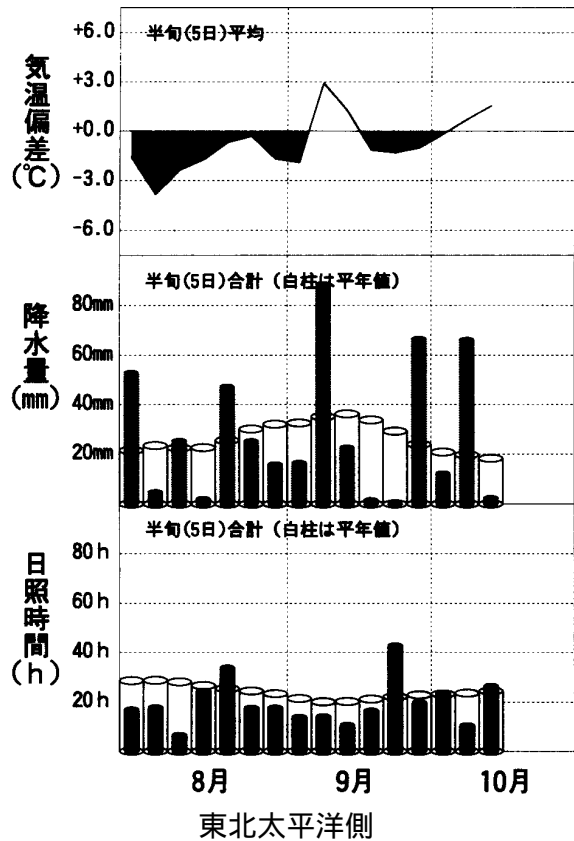
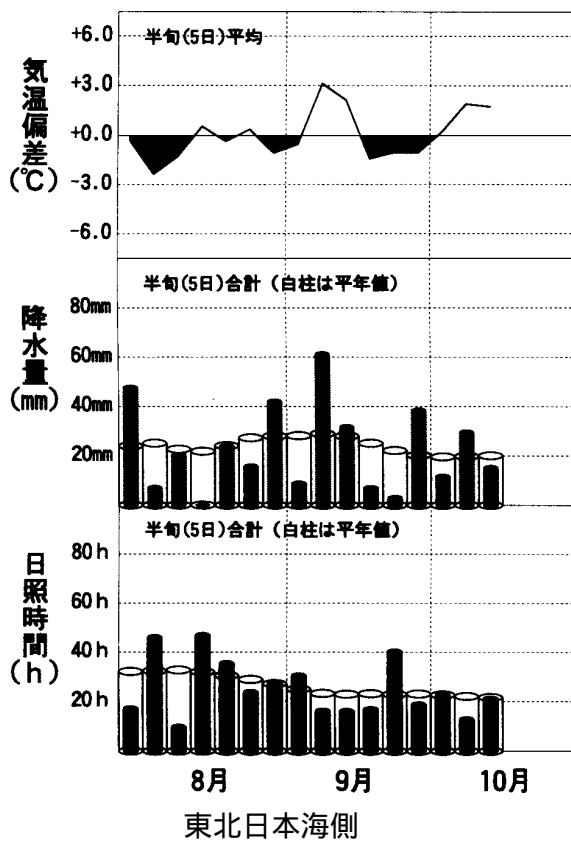
上旬は、4日や6～7日に移動性高気圧に覆われ概ね晴れた他は、低気圧や寒気の影響で曇りや雨となる日が多かった。特に、10日～11日にかけては低気圧が三陸沖を北上したため、東北太平洋側では大雨となった。

上旬の平均気温平年差は、東北地方で+0.1と平年並だった。降水量平年比は、東北日本海側で151%と多く、東北太平洋側で283%とかなり多かった。日照時間平年比は、東北北部で56%とかなり少なく、東北南部で75%と少なかった。

中旬は、低気圧と高気圧が交互に通過し、天気は数日の周期で変化した。11日に低気圧が三陸沖を北上し、東北太平洋側で大雨となった他は、天気の崩れは小さかった。

中旬の平均気温平年差は、東北地方で+0.7と高かった。降水量平年比は、東北地方で78%と平年並だった。日照時間平年比は、東北日本海側で114%と平年並、東北太平洋側では120%と多かった。

21日は移動性高気圧に覆われ概ね晴れた。

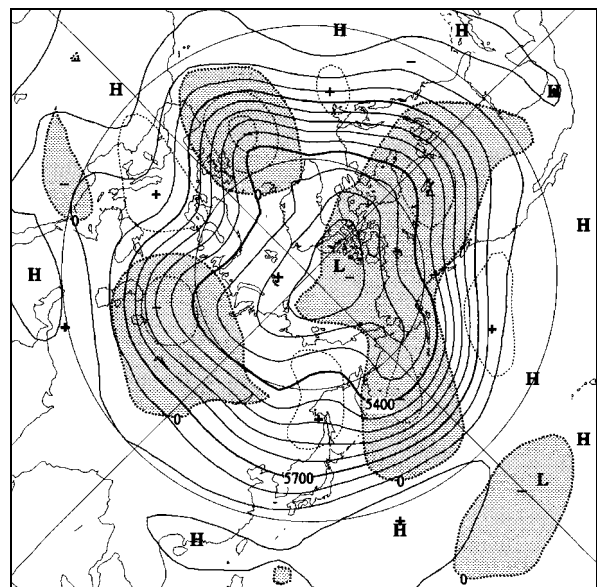


半旬経過図

(2) 中・高緯度の循環

10月(21日まで): 500hPa 高度場では、日本の東海上に負偏差が広がるが、大陸から日本付近にかけては広く正偏差に覆われる。

偏西風は、北海道の北の高緯度で蛇行が大きかったが日本付近は概ねゾーナルで、天気は周期的に変化した。ただし、日本の南東海上の太平洋高気圧は平年より強く西谷傾向となっており、低気圧が発達して通過する日もあった。



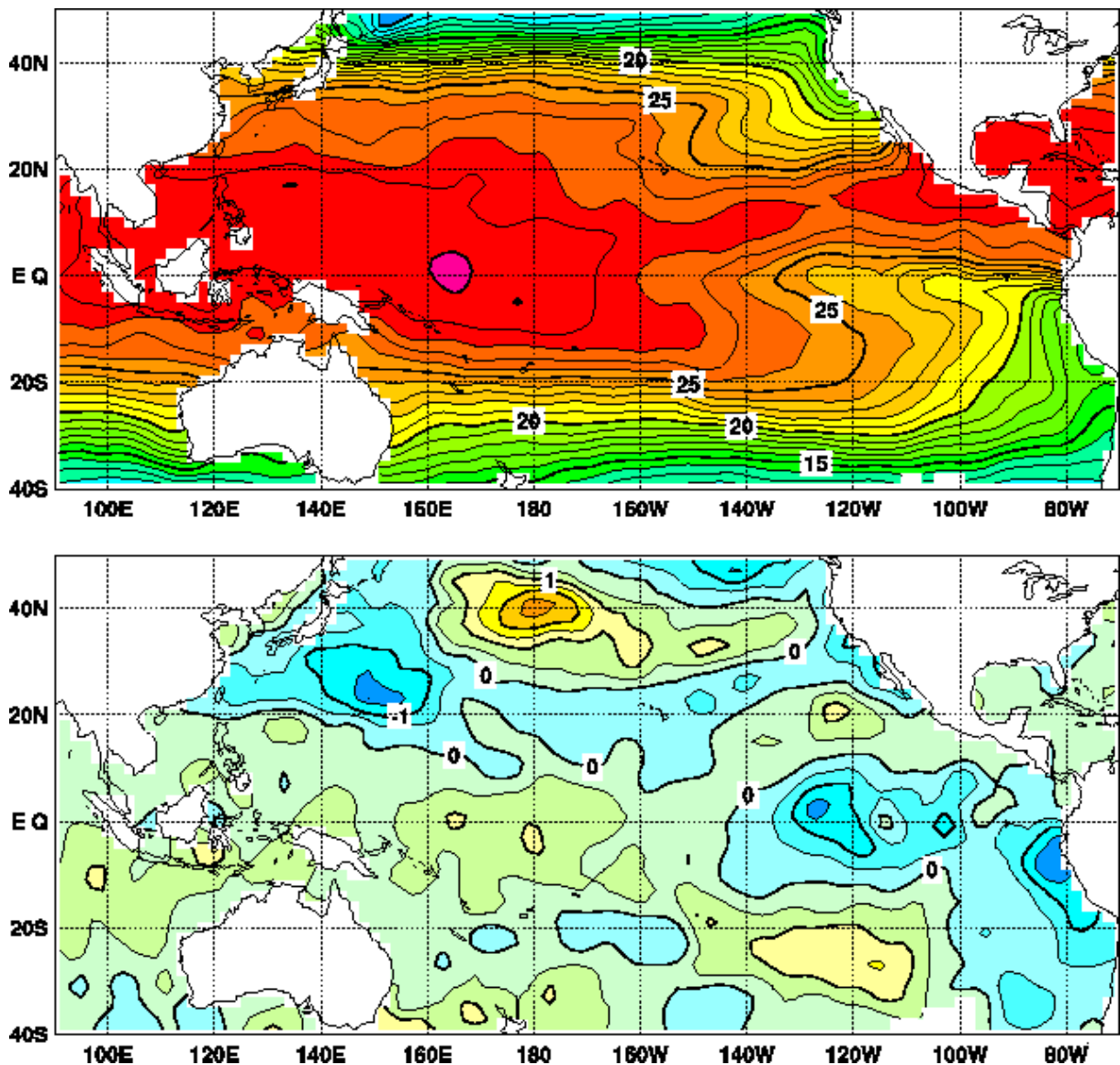
10月1～21日平均 500hPa 天気図
等高度線間隔 60m
陰影部は平年より高度が低い領域

(3) 太平洋赤道域の状況

エルニーニョ監視海域（北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度）の9月の海面水温の基準値（1961～1990年の30年平均値）との差は-0.4 だった。

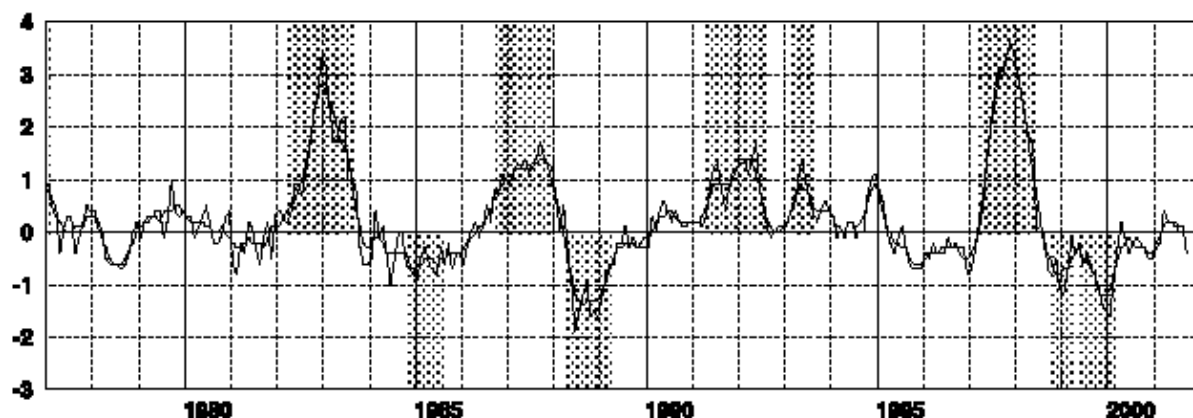
9月の太平洋赤道域の海面水温は、東経135度から東経145度と東経155度から西経165度にかけて平年より0.5 以上高く、東経165度付近と日付変更線付近には+1.0 以上の正偏差が見られた。一方、西経130度から西経120度にかけてと、西経105度付近では平年より1 以上低かった（下図）。

9月の南方振動指数は+0.2(暫定値)だった。（南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正（負）の値は貿易風が強（弱）いことを示す。）



2001 年 9 月の海面水温図（上）及び平年偏差図（下）

海面水温図の太線は5 毎、細線は1 毎の、平年偏差図の太線は1 毎、細線は0.5 毎の等値線を示す。海面水温図の陰影部は28 以上の領域を、偏差図の濃い（淡い）陰影部は+1 以上の正偏差域（0 以下の負偏差域）を示す（平年値は1971～2000年の30年平均値）。



エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差（ ）の推移
(1977年1月～2001年9月)

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は基準値より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は上側に、ラニーニャ現象の発生期間は下側に、それぞれ陰影を施してある(基準値は1961～90年の30年平均値)。

(4) エルニーニョ現象等の今後の見通し(2001年10月～2002年4月)

エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中、基準値(1961～1990年の30年平均値)に近い値で推移するものと予測される。

【解説】

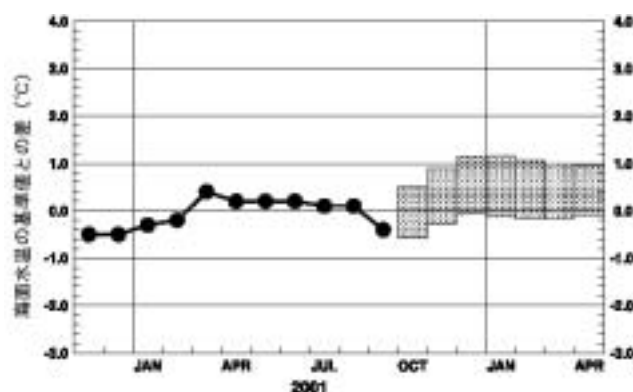
エルニーニョ監視海域の9月の海面水温の基準値との差は -0.4 で、2月以来初めて負の値になったが、南方振動指数は平年並の $+0.2$ (暫定値)であった。

海洋表層(海面から深度数百mまでの領域)の水温の状況は、夏以降正偏差域の中心はほぼ太平洋赤道域中部にあり、東部への移動は見られない。

エルニーニョ予測モデルは、監視海域の海面水温が11月以降基準値よりやや高い状態で推移すると予測している(右図)。

一昨年、昨年とも秋から冬にかけて、太平洋赤道域の中部と東部で海面水温の負偏差が強まる現象が見られ、今年も夏以降東部で負偏差域が広がった。しかし、今年は過去2年より暖水がより東方に広がっており、今後太平洋赤道域東部の広い範囲で海面水温が平年を大きく下回ることはないと考えられる。

以上のことから、エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中、ほぼ基準値に近い値で推移し、エルニーニョ現象やラニーニャ現象の発生する可能性は小さいと予測される。



エルニーニョ予測モデルによる

エルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測
この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温(基準値との差)の先月までの推移(折れ線グラフ)とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測(ボックス)を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。(基準値は1961～1990年の30年平均値)